

平成20年度質の高い大学教育推進プログラム審査結果表【選定】

機 関 名	札幌医科大学				
取 組 名 称	死亡時画像診断による教育支援プログラム				
取組学部等	医学部				
申 請 区 分	上記以外の工夫改善を主とする取組				
整 理 番 号	A31027	申請の形態	単独	取 組 期 間	3年
申請の分類	教養教育	専門基礎		キャリア	
キーワード	人間性豊かな医師の育成, 臨床病理検討会 (CPC; clinico-pathological conference), 死亡時画像診断 (オートプシーイメージング), 患者の死, 遺族との対話				

<選定理由>

本取組は、医師としての人格形成を促すことを目的として、患者の死および遺族に直面し、患者の死亡退院の際の医師の姿勢および遺族の心情を汲み取る姿勢を体験することから学ぶというユニークな教育プログラムである。特に、遺族との対話、アンケートなどにより、遺族に直面することを教育にとりこむことはこれまであまり例がない。さらに、死を科学的に理解していくために、従来の病理解剖の他に、遺体に侵襲のない死亡時画像診断（オートプシーイメージング）も活用し、その撮影・診断への学生の立ち会い・参加により、病気の本質・死因に直接せまる機会を増やすことにより、多数の学生に死に接する機会を与えるなど、本取組は、これまで避けてきた患者の死を直接に教育に組み込むことを実現し、医療に必須の態度教育として大きな効果をあげることが期待され、高く評価される。

本取組は、臨床病理検討会という授業を通じて展開され、5・6学年の医学生、200名を対象としている。臨床病理検討会内での授業設計は提示されているが、さらに、患者の死及び遺族に直面する前の準備として死生観・倫理・心理・マナーなどを学ぶ他の科目あるいは授業との有機的連携及び死・遺族に接した後の個々の学生への指導・成績評価の方法などを教育プログラムとして明確に設計し、組織的に対応することで、着実な取組として成果をあげることが期待される。さらに、本取組は、医学生のみならず、看護・医療技術学部学生へも拡大が計画されていることから、医療の質の向上への成果が期待される。

取組の概要【1 ページ以内】

現代の医学教育においては、優れた医療施行者としての能力に加えて患者や患者家族と適切に接することができるよう人間性豊かな医師の育成が望まれている。本来医師に必要とされる人間性については家庭や親族、友人との社会生活の中で育まれるという前提のもと、医学教育がなされているのが現状である。ところが核家族化が進んだわが国では他世代と接する機会が少ないため、身近に死を経験することなくして医師として巣立つ者が増えている。このため臨床現場に立って初めて患者の不幸な転機を目の当たりしてパニックや拒否反応を呈し混乱する場合があります、医療不信を助長させている要因にもなっている。

今回申請する取組は、死亡時画像診断（オートプシーイメージング）ならびに病理解剖を通じて臨床現場での死亡後の適切な対応とその重要性について経験させることにある。その特徴は大きく2つに分けられる。

- (1) 医学生が患者死亡時に立ち会う機会を設け、患者の死という従来の医学教育現場では取り上げられなかった事象について積極的に取り組む。日をおき遺族との対話をもうけることにより、患者家族から肉親をなくすという悲しみや喪失感、あるいは疑問等を直接聴き、経過中や亡くなった後の家族の心情変化と向き合う姿勢を身につける。
- (2) 死亡原因を医学的に探るべく、オートプシーイメージングと病理解剖を行った症例について臨床病理検討会（CPC; clinico-pathological conference）の教育コアカリキュラムに盛り込む。オートプシーイメージングの画像情報と病理解剖による解析結果を併せてCPCを行うことによって、診断に至るまでの思考過程や症状の病態生理、治療効果、診断の適否について考察する。さらに思考過程の盲点にも議論が及ぶこともあるため、結果として疾病に関する優れた理論展開を学ぶ。

本カリキュラムを修了した医学生は、医師が求められる高い人間性がいかなるものかを従来の学生実習では得られないかたちから学び取ることができる。また仮に医療紛争が生じる恐れがある場合でも、遺族の心情を踏まえて客観的な死因究明について適切な助言を行うことができ、ひいては医療紛争等による不要な労力や時間、経費を低減できるであろう。すなわち、オートプシーイメージングを通じて病理解剖の重要性を理解するとともに患者の死や遺族と向き合う機会を得ることは医学の発展に際して重要であるばかりでなく、より良い医療を提供するための素地となる。